



『梵鐘の恩人 坪井良平』

坪井良平

第二次世界大戦の金属類回収令（昭和16年）により多くの梵鐘が消失しました。幸いなことに、昭和14年坪井良平氏が『慶長末年以前の梵鐘』という研究報告を東京考古学会学報に掲載され、その報告は神寺名・住所・鋳物師名・銘文備考と正確を究めたものでした。鋳金界の重鎮香取秀真（かとり ほつま）氏が指示され、文部省は、国宝を初め由緒伝来のある慶長以前の中世鐘を、回収の対象外として各県に通達し、530口余の梵鐘が保護され今に残ったのです。

坪井良平氏は在野の研究家、興味を覚えその履歴を『新訂 梵鐘と古文化』記載等により調べました。

明治30年 1月30日(1897)生まれる。大阪市東区内淡路町1丁目大阪大倉商業学校卒。大阪鉄工所（日立造船（株）前身）大正 3年入社（17才）、終戦の玉音放送を日立造船（株）の工場で聞く（48才）1945年、ご子息（坪井清足氏：考古学者）23才。終戦により失職。

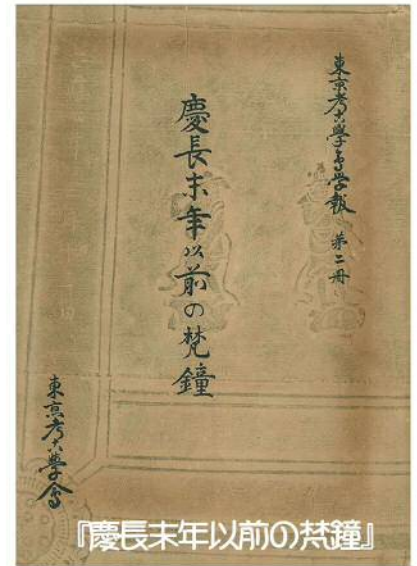
昭和23年(1948)年大洋海運勤務。昭和43年(1968)神戸新聞社平和賞、昭和47年紫綬褒章、昭和50年～53年文化財保護審議会専門委員、昭和50年(1968)兵庫県文化賞受賞、昭和59年没(1984)（87才）

彼の業績により、金属類回収令、回収の対象外梵鐘になったもの、『慶長末年以前の梵鐘』に記載、が姫路市内に2口残っています。一つは射楯兵主神社（姫路総社）の永正 3年（1506）、もう一つは勝瑞寺（姫路市御立）明応 6年（1550）です。播磨地域は古い梵鐘が多く残り、前記以外の梵鐘が、英賀神社、鶴林寺（朝鮮鐘）、圓教寺、瑠璃寺、亀山本徳寺、平疑原神社（おぎはら）、両松寺など10口以上。又、播磨鋳物師惣管職を務めた芥田家は姫路市野里に住んでいました、彼らの作品も含めて徐々に紹介します。

※ 慶長末年=慶長20年=1615年
慶長19年の大坂冬の陣と慶長20年大坂夏の陣

坪井良平 著作

図書名	著者	発行所	発行年
慶長末年以前の梵鐘	坪井良平	東京考古学会学報	昭和14年
梵鐘と古文化	坪井良平	大八洲出版	昭和22年
日本の梵鐘	坪井良平	角川書店	昭和45年
朝鮮鐘	坪井良平	角川書店	昭和49年
梵鐘	坪井良平	学生社	昭和51年
失亡鐘銘図鑑	坪井良平	青燈書房	昭和52年
梵鐘の研究	坪井良平	ビジネス教育出版社	平成 3年
梵鐘実測図集成	坪井良平☆	ビジネス教育出版社	平成 5年
新訂 梵鐘と古文化	坪井良平	ビジネス教育出版社	平成26年



新訂 梵鐘と古文化

つりがねのすべて

坪井良平



ビジネス教育出版社



勝瑞時梵鐘

来て！見て！ふれて！

ふしぎ体感

『鉄のふしぎ博物館』

鳥山 本徳寺

梵鐘に磁石がついた？

むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください！！

前月号の記事、いつもお世話になっている高橋様より、小室の天満神社住所は現在も神崎郡市川町小室であると指摘。（現 神河町）は誤りです。削除をお願いします。

姫路市指定有形文化財

勝瑞寺 梵鐘

総高 一四・九m 口径 七・五m
文（鐘銘）から明暦六年（一六六〇）
（江州備前守の浄心が製造と
なり廣業社推しとして鋳造、鋳造
者は野里鋳物師の藤原勝久・宗久
寛政六年（一七九四）の銘文）
追記）には勅許鋳物師 芥田五郎
石衛門源宗安、職主は勝瑞寺住持
元浄とあり、廣業神社から寺常
什物として移されたときの銘銘と
推定される。総じて閑素な姿をし
た梵鐘であるが、野里鋳物師の作
例として初見であり貴重なもの。

平成一四年二月
姫路市教育委員会

Temple bell of the SHOZU-ji temple
This temple bell is the ancient times the HOGATO-KUJI casting workshop
produces in 1660 and casting most for the work made of them. This temple
bell was moved here from the HIRUMI-JINJA shrine in 1794.